

## 映画『キルトに綴る愛』 —共感のパッチワーク—

### 『キルトに綴る愛』 ～ How To Make An American Quilt ～

アメリカ公開 1995年、日本公開 1996年

監督 ジョセリン・ムーアハウス

脚本 ジェーン・アンダーソン

原作 ホイットニー・オットー (Whitney Otto, 1995-)

キルト作りの仲間として集まった7人の女性それぞれの愛の物語が、1枚のキルトのパッチワークにも似た構成で綴られる一編。主要スタッフ、キャストが女性で占められた本格的な“女性映画”でもある。

大学院生のフィンはこの夏、祖母ハイとその姉グラディ・ジョーの住む家で卒論を仕上げることにした。幼い頃に両親が離婚した彼女は、恋人サムと婚約したものの結婚には懐疑的だった。祖母の家では何十年もの間、女たちが集まってキルト作りに励んできた。ある晩、祖母姉妹が昔話を始めた。夫が危篤に陥った時、気が動転したハイは救いを求めて姉の夫と過ちを犯してしまう。それを知ったグラディ・ジョーは怒り狂い、部屋中の瀬戸物を壊して、その破片を壁に塗り込めていった。夫に先立たれた今、姉妹はしこりを残しながらも同じ家に暮らしている。

ソフィアは、地質学者のプレストンと結婚し、やがて子供が生まれたが、夫は留守がちで彼女は育児に専念し、互いの愛も冷めていった。そして、ある朝、夫は出て行ったきり、二度と戻らなかった。また、エムは画家の夫ディーと結婚したが、浮気がたえず離婚も考えたがその勇気がなかった。そして、キルトのリーダー格で昔はメイドとして祖母姉妹に使っていたアンナは黒人のメイドの身には許されない、主人の息子との恋で子を宿した。その時生まれた娘マリアンナは、束縛を嫌って結婚せず、自由恋愛を楽しんでいる。だが、そんな彼女にもパリでの忘れられない出会いがあった。彼女たちはそんな愛の思い出を、フィンに贈るキルトの図柄に縫い込めていた。

一方、フィンの気持ちは相変わらず揺れていた。些細なことで喧嘩したサムとは仲直りできそうだったが、それでも彼女はプールで知り合った地元の青年と一夜の火遊びに走る。そんな時、突然、舞い戻った母親サリーが別れた夫、つまりフィンの父親と再婚すると言い出し、彼女はさらに混乱する。その時、町中を一陣の突風が襲い、フィンの書きかけの論文が宙を舞った。それぞれの女性の恋愛経験から、自分の道を模索するフィンの心の移り変わりを描いたストーリー。

